

中学校と大学の連携によるオンデマンド型授業の開発に関する研究

－ 中学校における探究的な学びの形を模索して －

長友紀子

(奈良教育大学附属中学校)

大山明彦

(奈良教育大学 美術教育講座 (伝統文化・文化財))

狩野宏明

(奈良教育大学 美術教育講座)

Research on the Development of On-demand Lectures through Collaboration between Junior High School and University:

Searching for Inquiry-based Learning in Junior High School

Noriko NAGATOMO

(Junior High School attached to Nara University of Education)

Akihiko OYAMA

(Department of Fine Arts Education, Nara University of Education)

Hiroaki KANO

(Department of Fine Arts Education, Nara University of Education)

要旨：本研究は、中学校美術科における授業のオンデマンド化の試みと、授業のオンライン化の展開に関する成果と課題を明らかにすることを目的とするものである。大学教員による専門的な授業は、総合学習に関連づけた内容と、卒業制作に関連づけた内容の2種類を実施した。授業実施後、google フォームによるアンケートと自由記述の内容から、成果と課題について検討を行ない、今後のオンデマンド型授業と授業のオンライン化の展開について考察を加えた。生徒の自由記述からは、大学教員による専門的な授業が生徒の興味関心に影響を及ぼし、思考を深めている様子が観察できた。

キーワード：オンデマンド型授業 ondemand lectures

探究型学習 inquiry-based learning

遠隔教育 distance education

1. はじめに

本研究では、奈良教育大学附属中学校（以下附属中学校と表記）で行った大学教員による専門的な授業のオンデマンド化を試みると共に、美術科における探究的な学びの形を模索した。

オンデマンド型授業やオンライン授業は、遠隔教育の手法の一つとして、近年様々な教育現場で実践が行われている。遠隔教育は、距離に関わりなく、状況に即した学習の形を可能とする方法として期待されており、児童生徒が多様な考え方に触れたり、協働的に学習を進めたりするための方法の一つとして効果が期待されるものである。

2020 年度に附属中学校と奈良市立田原小中学校で

行った遠隔協同学習に関する実践研究¹⁾では、小規模校と中規模校を双方向的にオンラインで結ぶことで、両校の生徒が多様な表現や発想に触れ、見方・考え方を深めることができることを明らかにした。

遠隔教育は、形式や目的によっていくつかの型に分類されるが²⁾、附属中学校と田原小中学校の遠隔協同学習は、これらのうち A 1 の遠隔交流学习にあたるものである³⁾。生徒らはオンラインでの交流に興味関心を持ち、積極的に取り組む姿勢を見せたが、それと同時に、両校の授業時間を合致させることの難しさや、言語活動などのコミュニケーションスキルの不足といった課題も明らかになった。コミュニケーションスキルの課題に関しては、日常的に対話の場面を授業に取り入れたり、プレゼンテーションスキルを習得できるような授業の組み立てを行ったりするなどして、中・長期的に能力を育成する

ことが可能であると思われる。一方、授業時間の合致といった学校間のシステム面での齟齬は、物理的に解消することが難しい場合が多い。

そこで、2021年度の実践では授業のオンデマンド化を試みた。具体的には、大学教員による専門的な授業をオンラインで実施し、その授業をオンデマンド化するので、これは、先述の遠隔教育の分類ではB2の専門家とつないだ遠隔学習にあたるものである。専門家と繋いだ学習で、生徒の学習機会の幅を広げるとともに、オンデマンド化することで、授業時間の合致しない学校間でも共通の学習内容に取り組むことが可能になる。その上で、オンラインの交流時間を取り入れるなどすれば、遠隔授業における課題の解決につながるのではないかとと思われる。

今回実施したのは、2つの専門家による授業である。附属中学校では、今回の実践以前にも、陶芸や絵画の分野で、大学の教員を附属中学校に招いた授業を行ってきた。大学教員の専門的な知識に触れる機会を得ることで、生徒は、美術に対する関心を深めたり、制作に関する疑問を解決したりしながら学習を深めてきた。このような学びの形は、美術科における探究的な学習につながるものと考えられる。本研究を通して、中学校美術科における授業のオンデマンド化について検討し、今後のオンライン授業の展開に関する課題を明らかにすると同時に、美術科における探究的な学びの形についても考えていきたい。

本研究は、題材立案、実践計画を長友が行い、オンライン授業の講義を、大山、狩野が行った。本文の執筆は長友が担当した。

1.1. 研究の目的

本研究の目的は、1つ目に、中学校美術科におけるオンデマンド型授業の題材開発と、今後のオンライン授業の展開に関する成果と課題を明らかにすること、2つ目に、美術科における探究的な学びの形を模索することである。

1つ目の、オンデマンド型授業の題材開発とオンライン授業の展開に関する課題を明らかにするという目的は、生徒の学びの形の多様性を広げる可能性を模索すること、遠隔授業を実践する際の物理的な課題を解決する方法を検討することを考えて設定した。

今回実施した2つの専門家によるオンライン授業では、授業を受けた生徒の反応から、オンライン授業と対面授業が生み出すそれぞれの効果を明らかにしたいと考えた。また、学びの形としては、双方をハイブリッド的に織り交ぜた授業づくりの方向性を見出すことができるのではないかと予測した。そして、実践後の授業検討から、今後のオンデマンド型授業題材の開発とオンライン授業の展開における成果と課題を見出していきたいと思う。

2つ目の目的である探究的な学びの形を模索することは、美術科においても重要であると思われる。

探究的な学びは、秋田喜代美によると、これまでは総合学習の文脈の中で取り上げられることが多かったが、近年すべての教科で探究的な学びを保障することの大切さが指摘されているという⁴⁾。同著の中でも紹介されているが、Education2030の提言などから見ても、探究的な学びの重要性は今後さらに増していくと思われる。

美術科の教科の目標には、創造活動の喜びを味わったりしながら豊かな感性を育んだり心豊かな生活を創造していくことなどがある⁵⁾が、この目標は、生徒の内面から美に対する興味関心を引き出すことができないと、形式的なもので終わってしまいかねないと感じている。美術科における探究的な学びは、生徒の内面から美への興味関心を引き出すことにつながり、ひいては美術科の教科の目標を達成し生徒の豊かな生き方の実現につながるのではないだろうか。

1.2. これまでの研究との関係

ここ数年のオンデマンド型授業に関する研究は、2020年からのコロナ禍の影響を受けたオンラインによる授業方法に関する内容が多く見られ、その多くが大学の講義に関する実践研究となっている。CiNiiおよびGoogle Scholarで2017年以降の研究をみると、「中学校」「美術科」「オンデマンド型授業」というキーワードでは、北海道教育大学札幌校の図画工作・美術科教育分野の研究⁶⁾が1件確認できた。この研究は、大学における図画工作科教育法の授業実践をもとに、オンデマンド授業形式を検証し、方法論について検討したもので、動画形式の授業が受講生の好感度が高いこと、配布資料に解説音声ファイルを伴う授業形式が妥当であることを成果としてあげている。

キーワードを「遠隔教育」「中学校」とすると、件数がやや増え、工藤雅人によるへき地教育に関する内容の研究⁷⁾等の成果があった。工藤の研究は、ICT活用による遠隔教育の有用性を示したもので、地域における美術科教員配置状況に鑑みて美術科教育の授業の質について研究する内容となっている。

このように、美術科教育におけるオンデマンド型授業や遠隔教育に関わる実践研究は、行われてはいるものの件数についてはまだ多くはないというのが現状であると言える。筆者は、オンライン授業やオンデマンド型授業は、美術科の題材の可能性を広げる手立てであるという考えから、これまでの美術科における遠隔教育やオンデマンド型授業の研究を参考に、実践を重ねていく意義があると考えて本研究を行うこととした。

1.3. 用語の定義

本研究では、オンライン授業とオンデマンド型授業という2つのキーワードを用いている。令和3年7月に

示された文部科学省の資料『オンライン授業に係る制度と新型コロナウイルス感染症の影響による学生等の学生生活に関する調査』⁸⁾によると、オンライン授業は、授業の方法のうち、メディアを利用して行う授業のひとつとされる。さらに、メディアを利用して行う授業は、「同時性または即時性を持つ双方向性（対話性）を有し、面接授業に相当する教育効果を有すると認められるものであること」⁹⁾として、その形態は「同時」（オンタイム）、「非同時」（オンデマンド）であると示されている。

本研究では、この文部科学省の示した内容に基づき、オンライン授業をメディア（本研究においてはインターネット）を利用して行う授業、オンデマンド型授業をオンライン授業で「非同時」である授業と定義する。2章以降に示す題材をこの定義に当てはめると、『絵因果経で知る画材の世界』はオンタイム型オンライン授業の形式を用いたもの、『制作をするということ』はオンライン型とオンデマンド型をハイブリッドしたオンライン授業の形式を用いたものとなる。

2. オンライン授業の実践

本研究では2つのオンライン授業を実施した。2021年1月から3月、同年6月から7月に実施した題材『絵因果経で知る画材の世界』、2021年10月に実施した観賞授業『制作をするということ』である。ここでは2つの題材・授業の実践概要と実践後に行ったアンケートの回答および感想から生徒の記述を示す。

2.1. 『絵因果経で知る画材の世界』題材のねらい

本題材は、絵因果経（奈良国立博物館所蔵『紙本着色絵因果経断簡 巻第二上(六十二行)』、(紙本・着色・卷子、奈良時代、8世紀)⁹⁾の模写を通して、墨による描写の魅力を感じ、顔料を中心とした画材について学ぶことをねらいとするものである。題材は、2021年1月から3月（第2学年3学期）に模写制作、同年6月から7月（第3学年1学期）にオンラインによる顔料についての講義および着色を行う流れで実施した。

附属中学校では、3年間を通して「奈良めぐり」と題する総合学習を行っており、附属中学校の所在する奈良県北部地域を中心に、地域の文化や歴史から探究的な学びを進めている。美術科では、この「奈良めぐり」の学習と関連させて、第2学年3学期に仏像に関する題材をとり上げており、本題材はその一つに位置づけるものである。絵因果経を題材としたのは、使われている画材が現在でも入手可能な墨と顔料であること、描画技法が素朴で中学生でも模写が可能であること、仏教の教典の一種ではあるが、説話的な内容となっており物語絵画としても親しむことができることなどの理由からである。さらに、奈良時代の絵画を今に伝える貴重な作品であるとともに、収蔵されている場所が地域に所在する奈良国

立博物館であることも理由となった。

題材を実施した学年は、修学旅行で熊本県水俣地方を訪れる予定で事前学習を進めていた。結果としては、コロナ禍の影響により訪問先の変更を余儀なくされたため、実際に熊本県水俣地方を訪れることはできなかったが、題材を構想した当初は、修学旅行事前学習として行っていた水俣地方の水銀被害の学習と関連づけて、美術科では水銀の原料である辰砂が古くから描画材料として使われてきたことや、吉野地方で実際に水銀が採取されていたことなどを取り上げ、多面的に事象や対象を捉えることができるように題材を構成しようというねらいがあった。

2.2. 『絵因果経で知る画材の世界』実践概要

はじめに、表1に題材の展開を示す。

表1 『絵因果経で知る画材の世界』展開

	学習活動
第2学年 3学期	模写制作 * 墨による白描 * 墨による描写の魅力を感じる * 模写を通して作品を深く味わう
第3学年 1学期①	オンライン講義 * 顔料を中心とした画材について学ぶ * 総合学習と関連し、水銀の画材としての側面を知ったり、産地としての奈良の地域について学んだりする
第3学年 1学期②	着色 * オンライン講義で学んだ内容を念頭に、顔料の魅力を感じながら実際に着色を行う

本題材で模写原本とした絵因果経は、奈良国立博物館収蔵の重要文化財『紙本着色絵因果経断簡 巻第二上(六十二行)』(紙本・着色・卷子、奈良時代、8世紀)の部分である。絵因果経は、奈良国立博物館収蔵品データベースに「釈迦の成道と教団形成に到る半生の伝記に、その因縁として前生の話を付した『過去現在因果経』を巻物の下半分に書き、上半分に経文に対応する絵を描いたもの。」¹⁰⁾とあるように、仏教に関わる内容を文字と絵で表した作品である。模写原本とした作品の絵画部分には鮮やかな色彩が見られ、同上のデータベースによると、「絵は構図・描写とも一見素朴であるのは、祖本よりさらに古い作品の骨格が伝えられているゆえと思われるが、小さいながらも写実味を備えた人物の相貌や立体感ある山や岩など、唐様式も確かめられ、彩色が鮮やかに保存されていることもあって、奈良時代の説話画の生きいきとした世界を十分に窺わせてくれる」¹¹⁾ 作品となっている。

絵因果経に使われている画材は、和紙、墨、顔料（辰砂、緑青、鉛丹、胡粉、藤黄、白緑青）である。このうち、実際に模写で使用したのは、和紙、墨、顔料（辰砂、緑青、鉛丹、胡粉）である。第2学年3学期の模写制作では、和紙に墨の白描による模写を行った（図1）。



図1 絵因果経（生徒による白描模写）

ここでは、墨と筆を使って実際に描いてみることで、奈良時代の絵画表現の魅力を感じることをねらいとした。墨での模写はやり直しが効かない。そのため、生徒は作品と丁寧に向き合い、細部まで観察してから制作に入ることになる。細部の観察は、絵因果経の線描の特徴を掴むことに繋がり、作品を深く味わうきっかけになると考えた。

次の段階として実施した第3学年1学期のオンラインによる顔料についての講義は大山が行った（図2）。



図2 オンライン講義（電子黒板映像）

大山は唐招提寺金堂や薬師寺東塔の彩色文様の復元図制作などに携わってきた絵画記録保存の研究者である。大山のこれまでの研究成果を交えながら奈良時代に使われた顔料について専門的に教えていただくことで、奈良

時代の絵画表現や描画材料の顔料について興味関心が深まることをねらいとした。

また水銀の原料となる辰砂について知ることで、修学旅行事前学習の水俣に関する内容とのつながりを考えることができるようにした。PCの画面録画で50分の授業を記録した。

顔料に関する授業を終えた後で、第2学年3学期に行った絵因果経の白描模写に、実際に使われた顔料を用いて着色を行った（図3）。



図3 着色の様子

使用した顔料は、辰砂、緑青、鉛丹、胡粉の4種類である。藤黄、白緑青については使用箇所が少なかったことと、制作時間の関係で、今回は省略した。

顔料についての知識を得た上で着色をすることで、生徒は、色について考えを深めながら制作ができるのではないかと考えられる。また、膠を顔料で溶いて着色する技法を経験することで、奈良時代の絵画技法に興味関心を持ったりすることにつながると考えた。

2.3.『制作をするということ』題材のねらい

2つ目のオンライン授業となる『制作をするということ』は、では、実際に画家として制作を続けている専門家の話を聞くことで、生徒の中に「卒業制作」のイメージを膨らませ、主題を掘り起こすことをねらいとした。

「卒業制作」は、附属中学校で美術科3年生の最終制作に位置づけて、2020年度から行っている題材である。「卒業制作」では、技法や素材を自分の主題に合わせて生徒自身が選択するようしており、生徒はこれまでに学んできた図画工作科・美術科の経験や知識をもとに、表現方法の工夫を行う。このように、主題と表現技法を関連させて制作を行うことはデザインベースの学習¹²⁾と同様に生徒の探究的な学びを促す働きがあると考え、授業を設定した。

2. 4. 『制作をするということ』実践の概要

はじめに、実践の展開を表2に示す。

表2 『制作をするということ』展開

	学習活動
インタビュー動画視聴 (20分)	オンデマンド（非同時）によるインタビュー動画の視聴 ＊狩野宏明准教授の展覧会会場と奈良を結んで行ったインタビュー動画
作品鑑賞 (10分)	美術教室に展示した作品を自由鑑賞
オンラインによる質疑応答	オンタイム（同時）による質疑応答
まとめ	附属中教員による授業のまとめ

本題材は、1時間の単発の観賞授業として、2021年10月に『絵因果経で知る画材の世界』と同じ第3学年を対象に行った。講師は狩野が務めた。狩野は、イタリアのルネサンス絵画を中心に、絵画における多様な空間表現の在り方について研究し、自らの作品に応用して制作を行っている画家である。

授業は、事前に収録した狩野へのインタビュー動画の視聴、オンラインによる質疑応答の2部に分けて展開を構成した。インタビュー動画の撮影は、2021年9月に山形県村山市立最上川美術館で開催された狩野の展覧会会場と附属中学校(インタビュアー:長友)、奈良市内の狩野をzoomで結び、その様子を録画する形で行った。インタビュー動画は、作品主題について、作品制作に関わる取材方法について、制作技法について等の内容で約25分程度の映像である(図4)。



図4 インタビュー動画

授業の事前には、classroom に狩野の HP を資料としてあげておき、生徒が作品をオンラインで見ることができるようにした。

当日は附属中学校の美術教室に実際の作品を展示して、実物の作品を見ながら授業を受けられるようにセッ

ティングを行った(図5、図6)。

インタビュー動画は、メモを取りながら視聴するように促した。質疑応答は約20分の時間を配分した。授業後、観賞ノート(美術科の授業用ノート)に講義の感想を記入させた。



図5 美術教室の展示風景



図6 美術教室内で作品を観賞

2. 5. 授業後のアンケートおよび感想

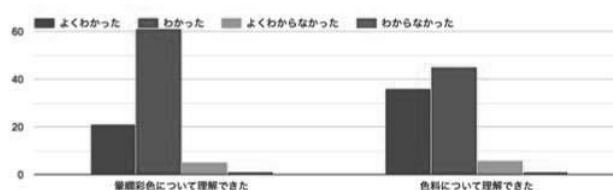
『絵因果経で知る画材の世界』では、大山のオンラインによる顔料に関する講義終了後、google フォームで事後アンケートを行った。アンケートでは、「縹緗彩色について理解できたか」「色料について理解できたか」、自由記述で「講義の感想」「オンライン授業についてどう感じたか」を聞いた(有効回答数 88/127)。

「縹緗彩色について理解できたか」について、「よくわかった」21、「わかった」61、「よくわからなかった」5、「わからなかった」1であった。

「色料について理解できたか」について、「よくわかった」36、「わかった」45、「よくわからなかった」6、「わからなかった」1であった。(表3)

表3 顔料に関する授業事後アンケート

内容の理解



次に、自由記述の「講義の感想」では、初めての内容について知ることができたこと、興味を持っていた内容について深めることができてよかったことの感想が多く見られた。

- ・一番印象に残っていることは色の原料についてです。(中略) 講義を受けて植物や動物、石、鉱物などから来ていることがわかりました。人工的なものなのかなと思っていたので、自然から色は来ていて意外でした。さっきも書いたように石がキラキラしていて、そのキラキラしているのは顔料を使って作った作品にも出ていたので面白いなと思いました。
- ・昔の絵の具について気になっていたのもとても興味深かったです。特に同じ原料でも砕き方によって別の色になるというのが印象に残りました。
- ・自分が使う道具のことをよく知らずに使うことに対して違和感をもっていたので、よい機会でした。
- ・今回の講義で一番こころに残っているのは、1つの色に何個か原料があるということです。原料といわれ赤はなんだろう？と思っていたのですが3つぐらいあって1つじゃないんだと思いました。美術の授業は、作品を作り想像力や創造力を養いますが今回の講義のような深いことも知るのとはとても面白かったです。講義で習ったことを授業で深めていけるともっと美術が面白くなっていくと思います。

また、総合学習（地域学習・修学旅行の事前学習）の内容に関連した記述も見られた。

- ・自然のものからあんなに色鮮やかな色を作り出せることに感動した。(中略) 講義の中で当時水銀が使われていたという話があったが、危険ではなかったのだろうか…。また、水銀の他にも人体に影響のある顔料はなかったのだろうか。
- ・奈良時代の色の多種多様なことに驚きました。しかも、色の濃淡によって微妙な色を作り出せていたことを知り、技術が大変高かったことがわかりました。「奈良」の枕詞である、「青丹よし」も、丹から来ていると知り、それほど奈良時代の奈良は色で溢れていたんだなと思いました。

『制作をするということ』の鑑賞ノートの感想は、制作の発想がどのように生み出されるのかについて聞いた

ことが印象に残ったということ、制作を続けるという生き方に関して感じたことなど、内容は多岐に渡った。卒業制作について改めて考えた、という感想も複数見られた。

以下に生徒の感想を示した。長い引用になるが、講義を受けて自分自身のこれまでの疑問と改めて向き合い、考えを深めている様子が見られた例としてあげておきたい。

- ・「作品をつくること」については、今までにも何度か疑問に思っていたことがあった。自分の思いを人に伝えることによって果たして何になるのか？造るって何なのか？私たちは命をつくっているのか？何を目指しているのか？この作品は世の中にどういう影響を及ぼしたのか？など、一人で考えてもらいのあかないようなことを考えながら、作品をただ、つくっていた。今回、「自分の世界」を確立している人の話を聞いて、本当によかったと思う。「自分の考えを表現できている人」の作品は、こんなにも人に印象を与え、こんなにも価値観を揺るがしてくるものなのか、と感心した。色の使い方、描く対象、全てに根拠があって、何かを生み出すという責任のようなものを感じた。どんなことを見ている人に感じさせたいか、まで考えているのには驚いた。実際、狩野さんの言う「ギャップ」も感じたことから、「この人はこんなにも作品を操作できるのか」と「考えたものを表に出す」という力を感じた。私はいつも作品を見ると、「他の人と違う」ところを見て自分の中で評価づけしてしまうのだけれど、狩野さんの作品には「人と違う」ところよりも狩野さんの作品に見入ってしまった。人に評価されるというのはこういうことなんだと学んだ。卒業制作にとって、とても良い刺激になったし、改めて自分の考えているモノについて考えることができたと思う。「何を見て何を感じてほしいか？」この基となる部分をもう一度、自分の中ではっきりさせなければならないと思った。そして、狩野さんのように、見る人が感じることを操作できるような作品をつくっていけたら、と思う。

3. 成果と課題

3.1. オンデマンド型授業の題材開発とオンライン授業の今後の展開

本研究で行った2つのオンライン授業は、奈良教育大学の2名の教員と、最上川美術館の皆さんの協力の元、実施することができた。

大山の文化財保存・修復に関する講義は、豊かな経験と確かな資料に基づいた内容で、教科書等では触れることの難しい内容が提供されたと思う。狩野の講義は、実

際の作品に触れると共に、作者に直接、作品に関してや、制作における考え方について質問することができ、生徒にとって大きな刺激となった様子が観察できた。また、最上川美術館の皆さんに全面的にご協力いただいたことで、教室にしながら、美術館での空間を感じながら作品に触れることができた。

今回行った、オンデマンド型授業の題材開発とオンライン授業の今後の展開の実践の成果は、さまざまな立場の専門家と協同することで、題材の幅を広げたり内容を深めたりできたことだと思われる。2つの講義は、それぞれ異なる生徒の学びに対する目的に対して、内容が構成されていたが、専門家の持つ知識や経験に触れることで、中学生の興味関心が刺激され、知的好奇心を起こさせる要因となったことは、生徒の自由記述などから窺えた。オンライン授業の形を取れば、講師の移動などの物理的・時間的な手間を省くことができ、授業実施に対するマイナス要因が少なくなることで、さまざまな講師の方の参加を促すことができるということも実感できた。

オンデマンドとオンタイムをハイブリッドで構成した『制作をするということ』の題材では、前半部分のインタビューをオンデマンドで行うことで、授業内容の密度を上げることができたことは成果であると思う。後半部分の鑑賞と質疑応答につなげるために、伝えるべき内容を事前に整理し、インタビューのリハーサルは繰り返し行った。また、展示風景を中継していただいた美術館の方と作品の映り方について検討する時間が丁寧に取れたことで、20分の限定した時間の中で伝えたい内容を網羅することができた。視聴内容を精査できること、番組としての構成を練ることができることの2点はオンデマンドの形を取る成果としてあげておきたい。

その他に授業を行って気づいたことは、オンラインで講義を行う講師と、教室にいる教員がteam teachingの形で授業を進めると、生徒の理解が深まるということだった。大山の顔料に関する講義では、中学生向けに易しくお話いただいたが、その中でも中学生には分かりにくい言葉遣いがあったり、資料の漢字が読めないなどの問題が起こった。教室にいる教員は、生徒にとって難しそうな部分に気づいた時に講義を一旦止めて説明の言葉を挟むことで、生徒の理解を補助することができた。これはリアルタイムのオンライン授業でもオンデマンド型授業でも実行可能なので、今後の実践でも取り入れると良いだろう。

本研究のオンライン授業は、講義の様子をzoomやmeetの録画機能を利用して記録した。また、インタビュー動画は独立した映像素材として保存しているため、今後も使用することが可能である。次年度以降の附属中学校での授業に活用することや、希望があれば他の中学校の美術科の授業で利用してもらうことも可能であり、オンデマンド型教材として使用した場合にどのような学習効果があるかを、今後実際に授業で使っていた

く場を探して検討していきたいと思う。

3.2. 美術科における探究的な学びについて

美術科の教科の目標には、創造活動の喜びを味わったりしながら豊かな感性を育んだり心豊かな生活を創造していくことなどがあるが、この目標は、生徒の内面から美に対する興味関心を引き出すことができないと、形式的なもので終わってしまいかねない、と本論の中で述べた。今回、専門家の方の話を聞いた生徒から、「美術の授業は、作品を作り想像力や創造力を養いますが今回の講義のような深いことも知るのとはとても面白かった」という感想が出てきたことは、生徒の内面から美術に対する興味関心を引き出したという点で、探究的な学びの形としての成果と言える。この生徒は、続けて、「講義で習ったことを授業で深めていけるともっと美術が面白くなっていくと思います」と述べた。この生徒が述べたような形で学習が進んでいけば、美術科における探究的な学びのあり方を作り出すことができるだろう。

『制作するということ』の講義後の感想からは、作品を制作している作家の言葉を直接聞くことで、生徒の思考が刺激されている様子を見とることができた。本文で引用した生徒の感想に、「自分の思いを人に伝えることによって果たして何になるのか？ 造るって何なのか？」とあったが、この思いは美術科の学びにとって根源的な問いである。この生徒は、作品をつくることについて、「今までにも何度か疑問に思っていたことがあった。」と述べていたが、『制作するということ』の授業を通して、自分の中に生まれた疑問に向き合い、思考し、自分なりの結論を見出した。対象となった第3学年は、この後3学期に卒業制作を行い、中学校の美術科の授業を修了する。卒業制作の作品に、生徒が思考し見出した結論が何らかの形で表出することが期待できる。生徒が感想を記述する中で思考を深め、現在の自分なりの答えに近づこうとしたことは、意義深いことであり、問いが生まれる授業の形としての可能性を感じることができた。

振り返ると、すべての生徒の思考が深まったわけではなく、あまり反応のなかった生徒もいたという課題もあった。また、オンラインでのやり取りをスムーズにするための機器の扱いについても課題があると感じた。

これらの成果と課題を踏まえ、美術科における探究的な学びは、生徒の内面から美への興味関心を引き出すことにつながり、ひいては美術科の教科の目標を達成し生徒の豊かな生き方の実現につながるという考えを持って、今後も実践を重ねていきたい。

3.3. おわりに

図画工作科・美術科は、表現や鑑賞の活動を通して、創造的な表現力・思考力を育成する教科であり、この表現力・思考力の中には、主題を生み出す力や表現したいことを形にする力、意図を他者に伝える力などの要素が

含まれている。自己や他者、社会に対する課題＝主題を見出し、考え、作品として表現する能力を育成する教科として、生徒のより良い学びについて考え続けていきたいと思う。

謝辞

本研究を行うにあたり、山形県村山市最上川美術館には、展示会の会期中に展示室から中継をしていただくなど、多大なご協力をいただきました。本研究に関わってくださった皆様のご協力で内容を深めることができたことに、心から感謝を申し上げます。

注

- 1) 長友紀子・大西華・竹内晋平(2021),「同一地域内の学校間で行う中学校美術科の遠隔協同学習の研究－奈良教育大学附属中学校と奈良市立田原中学校の実践から－」『奈良教育大学次世代教員養成センター紀要』第7号,pp107-115
- 2) 文部科学省『遠隔教育システム活用ガイドブック』第3版,
https://www.mext.go.jp/content/20210601-mxt_jogai01-000010043_002.pdf
(参照日:2021.11.16)
- 3) 同上,pp4-5
以下のような分類が示されている。
A 1: 遠隔交流学习
A 2: 遠隔合同授業
B 1: ALT とつないだ遠隔学習
B 2: 専門家とつないだ遠隔学習
B 3: 免許外教科担任を支援する遠隔学習
B 4: 教科・科目充実型の遠隔学習
C 1: 日本語指導が必要な児童生徒を支援する遠隔教育
C 2: 児童生徒の個々の理解状況に応じて支援する遠隔教育
C 3: 不登校の児童生徒を支援する遠隔教育

C 4: 病気療養中の児童生徒を支援する遠隔教育
D: 家庭学習を支援する遠隔・オンライン学習
E: 遠隔教員研修

- 4) 秋田喜代美(2018),「探究的な学びを支援するために: 海外の研究から見る5つの提言」『日本教材文化研究財団研究紀要』第48号,pp9-14
http://www.jfecr.or.jp/cms/zaidan/publication/pub-data/kiyou/h31_48/kiyou48.pdf
(参照日:2021.11.23)
- 5) 文部科学省『学習指導要領(平成29年告示)解説美術編』,p 9
- 6) 花輪大輔・李知恩・牧野香里(2021),「新型コロナ禍におけるオンデマンド型授業形式の妥当性の検討: 図画工作・美術教育分野の授業実践を中心に」『北海道教育大学紀要. 教育科学編』第72巻,第1号,pp445-455
- 7) 工藤雅人(2018),「中学校美術科におけるICTを活用した遠隔授業に関する研究 北海道の離島の中学校における実践研究を通して」『美術教育学』第39号,pp113-125
- 8) 文部科学省『オンライン授業に係る制度と新型コロナウイルス感染症の影響による学生等の学生生活に関する調査』
<https://www.mext.go.jp/kaigisiryoo/content/000125290.pdf>
(参照日:2022.1.10)
- 9) 奈良国立博物館収蔵品データベース,『絵因果経』(1巻,紙本,著色,卷子,絵画,奈良時代,8世紀)
<https://www.narahaku.go.jp/collection/757-0.html>
(参照日:2021.11.1)
- 10) 同上
- 11) 同上
- 12) 秋田喜代美(2018),前掲論文,p11
ダーリングーハモンドらの著作から、探究的学習のアプローチとして、プロジェクトベース学習、プレムベース学習、デザインベース学習の3つをあげている。